

2020 年度 JNA 収録 DVD 研修
『認知症高齢者の看護実践に必要な知識』 12/8-12/9
質問に対する回答（会場：静岡県看護協会）

①【質問内容】

畠中先生の講義の中に独自のケアガイドブックの紹介がありましたが「説得」より「納得」を図るという内容、意味を教えてください。忙しくなると患者様にお待ちいただきたときに「少しお待ちください」と繰り返し説明しても理解がえられない際「順番で対応するのでお待ちください」とお伝えしていることがあります。対応方法として正しい方法を教えてください。

【回答】

「順番で対応するのでお待ちください」という声掛けが決して間違っているわけではないと思います。しかし、この場合は医療者が対応できないという事実のみを相手に伝えているので、待ってほしいという【説得】になってしまっているのかもしれません。

対応方法としては、本日は 2 つの視点をポイントとしてお伝えしたいと思います。まず 1 つ目は、認知症の方の思いに関心を寄せ、「何に助けを求めているのか」「時間的に待てることなのか」というアセスメントが大切になると思います。

2 つ目は、待ってほしいという医療者のお願いが認知症の方に伝わったことを確認した後の対応です。記憶を保つことが難しい方であれば、いつまで待てばよいのかメモに記して時計とともに目に付くところに残す支援が効果的な可能性もあります。また、その方が待つ場所の音・光・臭いなどの環境を確認して、ご本人が安心して待つことができる環境を整える支援も大切になるかと思います。

それでもなお、繰り返し対応を希望する訴えがあるのであれば、繰り返し訴える理由がきっとあります。繰り返す言葉の背景に、身体的な苦痛や精神的な不安・混乱が潜んでいないか、丁寧に確認していく必要があると思います。

②【質問内容】

院内デイケアのケア内容について、クイズ、ゲーム、体操とありますが、その詳細と意味、どのような効果があるのか教えてください。

【回答】

院内デイケアの対象者、プログラム内容、頻度、施行時間とその効果に関しては、明確なエビデンスが明らかになっていない現状があります。院内デイケアで行う、認知機能を多方面から刺激する集団プログラムを認知刺激療法と定義するとします。認知刺激療法は、軽度から中等度の認知症の方であれば、認知機能を賦活させ QOL の改善が得られるという一定のエビデンスが蓄積されつつあります。

本日は例として、音楽療法についてお伝えしたいと思います。認知症の方は音楽に対する記憶は比較的保たれるともいわれていますので、音楽療法は認知症症状の緩和に役立つことが期待されています。音楽療法には、歌うことと聴くことの 2 つに大きく分かれますが、歌ってもらうような積極的な音楽療法より、音楽を聴いてもらう受動的な音

楽療法のほうが、焦燥性の興奮・行動障害や不安を改善させたという報告もあります。医中誌 Web でも多くの研究報告や解説、各施設での取り組みなどの報告がありますので、参考にして皆さんの組織で行う活動を検討されても良いかと思います。

● 医中誌：キーワード「認知刺激療法」…エビデンスや解説
キーワード「院内デイケア」…各施設の取り組み

【回答】

院内デイケアで実施できるプログラムは、各施設の体制によって異なると思います。まずは、皆さんの組織で院内デイケアのために使用できる資源（人・物・場所）を明らかにしてから、計画を立てると良いと思います。

その際のプログラムは、中等度の認知症の方が実行可能なものを検討すると良いと言われています。例えば風船バレーをするならば、軽度認知症の方は団扇で風船を打ち返してもらうなど難易度を工夫して、それぞれの参加者が楽しめるような工夫が検討できればより良いと思います。

③【質問内容】

現在認知症身体抑制軽減に向けて院内で取り組みを行なっています。その一環としてスタッフへの意識調査を行っていますが、認知症患者さんに対し身体抑制が必要と考えるスタッフが半数以上います。取り組みとして教育と体制整備のどちらから取り組むことが実行可能で効果的なのか調査後の取り組みの方向性に悩んでいます。オンラインでの学習は行っていますが、それ以外の方法があったらアドバイスをお願いします。

【回答】

まず、自組織で行われている身体拘束に対する現状調査をしていることや、件数だけでなくスタッフの意識調査もされているということは、とても素晴らしい取り組みだと思います。そして、身体拘束を減らすための取り組みとしては、教育と組織の体制整備は両輪となり、どちらも重要なポイントになると考えています。鶴屋先生の講義では、P94-95 に多職種チームで検討すること、ふさわしい医療とケアの工夫についてお話があったかと思います。それ以外の方法を知りたいとのことでしたので、私の組織での取り組みについてみなさんと共有したいと思います。

1：組織として取り組むべき課題について整理する

意識調査の結果、半数のスタッフが認知症をもつ入院患者さんに身体拘束が必要であると考えているようですが、その背景にはどのようなスタッフの思いがあるのかを確認する必要もあると思います。そうすることで、スタッフの行動や意識に影響している背景を分析して課題を明確にすることができます。そうすれば、その後の取り組みの方向性が見えてくるかもしれません。

2：教育的な関わり

私の所属する組織では、教育的な関わりとして様々な研修を行ってきましたが、実際に入院している患者さんの事例紹介や事例検討はとても好評でした。研修形態は 2 種類あり、30 分程度で事例を紹介して聴講する方法と、看護部の教育研修（看護倫理や看

護過程)でグループワークのなかで事例を検討する参加型の方法があります。後者の研修のメリットとして、4つの視点をご紹介します。

- ① 研修の中で事例を展開できるので、考える時間が保証されている
- ② 認知症の方の「行動」と「背景」にはどのような関係があるかについて、同僚とともに丁寧に考えることができる
- ③ なぜこの認知症ケアが必要なのか、その意味を言語化することができる
- ④ ②と③を認知症ケアの知識・経験として積み重ねることが実践力の向上に繋がる

3：同じ意識をもつ仲間をつくる

仲間をつくり取り組むことはとても大切です。皆さん、ぜひ仲間を増やしましょう。そのための方法の1つとして、本日のような教育研修への参加を組織として計画的にしていくことも良いのではないのでしょうか。